

日本大学社会科学科・学会創設百年の歩み

—その活動記録から学ぶべきもの—

松 岡 雅 裕

はじめに

1920（大正9）年創設の日本大学社会科学科および社会学会は、今年度百周年を迎えた。これを記念し、また後進たちの教育活動にとって多少なりとも道標的なものになることを願いつつ、ここに学科および学会百年の歩みを記すものである。何分、百年という世紀をまたぐものであり、限られた紙幅のなか、記載できる内容にも限界が生じることは当然である。ここでは、百年史の重要ポイントともいうべき事柄にとどめ、巻末にこれを補う参考文献を記そうと思う。

1. 大正デモクラシーと学科・学会の創設

学科および学会が創設された1920年は、まさしく大正デモクラシーの時代であった。第一次世界大戦が終結し、政治のみならず、文化・芸術、そして市民生活の広範囲にその影響は及んでいた。ちなみに、創設の前年1919年から1920年に至る内外の社会情勢を年表形式でふりかえっておきたい。

1919年

- 1月：パリ講和会議、河上肇『社会問題研究』創刊
- 2月：普通選挙期成大会、長谷川如是閑『我等』創刊
- 4月：『改造』創刊
- 6月：ヴェルサイユ条約に調印
- 8月：大川周明・北一輝ら猶存社を結成、大日本労働総同盟友愛会
- 12月：協調会設立

1920年

- 1月：国際連盟成立・加入
- 2月：尾崎行雄らの普通選挙大示威（デモ）行進

- 3月：株価大暴落・戦後恐慌の発生、平塚らいてう・市川房枝らの新婦人協会発足
- 5月：日本初のメーデー（上野公園）、労働組合同盟会の結成
- 6月：わが国初のマルクス『資本論』邦訳出版
- 10月：わが国初の国勢調査実施
- 12月：大杉栄、堺利彦らの日本社会主義同盟結成（翌年禁止）

選挙制度の改革運動は大正デモクラシーの象徴的な潮流ではあったが、同時に第一次世界大戦後の戦後恐慌の発生、労働運動の高まりにも注視すべきであろう。見方によっては、明治以後の日本が推し進めてきた近代資本主義政策が大きな分岐点を迎えていたのである。ロシアでは革命後の臨時政府が連邦国家設立（1922年）に向けて着実に新たな体制を整えつつあった。資本主義と社会主義、さらに社会主義内ではボルシェビキとアナーキズムという選択肢の前で、日本は分裂の危機に直面していたのではないか。

ここで注目したいのが、1919年12月に設立された「協調会」の存在である。これは、わが国資本主義の父とも称される渋沢栄一が推し進めた労資協調政策の推進母体ともなった団体である。この団体もやがて右派・左派に分裂し、戦時中は労資協調どころか、労資一体化政策へと変貌し、やがて戦後解散させられるのだが、この、わが国の分裂を阻止しようとした潮流が、まさしく社会学科創設者圓谷弘のアカデミックな趣旨ともおおいに重なり合うのである。

社会学科および学会創設者圓谷弘（つむらや ひろし：1888－1949）は秋田県角館町に生まれ、日本大学専門部法律科に学んだあと、京都帝国大学文学部哲学科選科を修了した。その後、文部省実業事務局嘱託を経て、1920年日本大学助教授となり、専門部社会科（現文理学部社会学科）、芸術科（現芸術学部）、高等工学校（現理工学部）、さらには農獣医学部（現生物資源科学部）設立に尽力したのである。

圓谷の学問遍歴を見るに、日本大学法律科時代に薫陶を受けたのが刑事政策の山岡萬之助、京都帝国大学時代における社会政策の戸田海市と、いずれも政策志向に重きをなしている。ここには、貧しい家庭に生まれ辛酸をなめた圓谷の人生体験が反映されている。しかし、やがて邂逅する庶民的視線の代表ともいべき米田庄太郎の社会学が、政策学プラス社会学と

いう圓谷の学問的志向を決定的なものにした。

京都帝大修了後、圓谷は文部省に嘱託職員として勤務していたが、この時日本大学は、従来の「専門学校令による日本大学」から、1918年に公布された「大学令による日本大学」へとその昇格問題を抱えていた。圓谷は母校日本大学の常務理事となっていた恩師山岡に連絡を取り、自身で昇格申請手続きの労を取りつつ、新生日本大学に社会科学部設置の構想を投げかけたのである。しかし、山岡の反応は芳しいものではなかった。つまり、「社会学か…世間から社会主義者の養成機関と誤解されるのではないか？」という危惧があったのである。そこには、恐るべき社会主義者の養成機関という世間からの誤解と、「社会主義が学べる」という社会主義に期待を寄せる若者からの誤解という両面への危惧があった（事実、専門部社会科学部開講後、社会科学部は専門部でも群を抜くほどの学生を集めたが、やがて社会主義者の養成機関ではないと判明し、大半の若者が退学していったという）。山岡の危惧に対して、労資対立による社会分裂の危機を乗り越えるための社会学の役割を圓谷は情熱的に語り、やがて躊躇する山岡を説き伏せて社会科学部設置を認めさせたのである。同時に、圓谷の学問的信念に感服した山岡は、圓谷を母校日本大学に呼び戻し、社会科学部運営を彼に一任するのである。ここに、32歳の若き青年科長が誕生したわけである。

では、日本大学専門部社会科学部開設の趣意書を記しておこう。「最近に於ける社会関係殊に経済関係は、大戦の影響を受け激変を來たし、混沌として把握すること能はざるの趨勢を呈せり。この趨勢を善導し共同生活の安定を図るは識者の努力せざるべからざる所なり。この事たるや、學術上に基礎を置くに非ずんば、善く之を達成する事難し。(以下略)」圓谷が心を配ったのは、大戦後の経済関係の激変と混沌とした趨勢であり、それらを「善導し共同生活の安定を図る」ことにあったことが見て取れよう。ここには、明らかに先述した協調会設立と重なり合う意図が存在する。初年度のカリキュラムを見ると、本命の社会学は、社会科学部開設以前から日本大学で社会学の教鞭をとっていた巣鴨学園創立者遠藤隆吉が引き続き担当し、圓谷は社会政策を担当している。このあたりは、趣意書に表れた圓谷の「この趨勢を善導し共同生活の安定を図るは識者の努力せざるべからざる所なり」という政策的実践を意識していたのかもしれない。他に講師陣の中には、「輓近社会思想」の担当者として、戦後日本国憲法の「象徴天皇制」発案者の一人であった杉森孝次郎の名前も見える。

なお、翌2年目に、圓谷は文部省からヨーロッパの教育事情視察団のメンバーに指名されてフランス・ドイツに留学することとなり、圓谷不在の穴を埋めるべく、京都帝大時代の先輩高田保馬、ドイツ形式社会学の松本潤一郎らが講師陣に加わることになる。圓谷の留学成果は、後年デュルケムの社会学主義とフッサールの現象学を総合化するという、学位論文ともなった『集団社会学原理』（1934年、同文館）として結実した。

学科創設と同時に圓谷が力を入れたのが日本大学社会学会の設立である。当初は、学生への教育的啓蒙団体を意図していたものと思われるが、学科創設の同年6月27日に第一回講演会が、同年10月17日には第2回講演会が開催されている。第一回講演会の内容は、大庭柯公の「ロシア人の友愛性と残虐性」、小林郁「農村社会学」、江口涵「民衆芸術論」、遠藤隆吉と圓谷弘の「所感」である。ロシア研究の大家でジャーナリストでもあった大庭の講演タイトルなどは、社会科に社会主義者養成機関としての期待で入学してきた学生たちに、ロシア人の真実の姿を伝えるという教育的配慮が意図されていたようにも推察されるのだが、いかがであろうか。

2. 月刊『社会学徒』発刊事情

日本大学社会学科および社会学会のわが国社会学史上における功績のまず筆頭に挙げられるべきは、月刊『社会学徒』の刊行であろう。わが国初の月刊社会学専門誌であり、1927（昭和2）年の創刊から1944年の終刊まで207号を発行しつづけた。これは一大学の学内紀要ではなく、学内外にわたる多数の研究者の論考や海外の注目すべき論文の翻訳掲載にいたるまで、今日の視点でも学術専門誌として見劣りするものではない。

そもそもこれは、第1回卒業生であった浅野研眞が圓谷に企画をもちかけたものだという。当時、圓谷は社会学科長であると同時に高等工学校の学監という多忙な身にあり、雑誌編集に時間を割くことが困難な状況にあった。そこに、雑誌編集に長けた浅野が編集企画を引き受けるとばかり企画を持ち込んできたのである。浅野は、フランス留学中に苦勞して入手した何百冊ともいわれるオーギュスト・コントにかかわる研究文献をわが国にもたらしたコント研究の第一人者であり、さらには『駿工』『ソシウス』『佛陀』といった雑誌編集も手がけ、その編集者としての腕前には定評があった。浅野は、その場にたまたま居合わせた後輩櫻井庄太郎を巻き込み、『社会学徒』発行を圓谷に承諾させたのである。結果、監輯圓谷、

編集櫻井、企画協力浅野という布陣で、わが国初の社会学月刊専門誌『社会学徒』は創刊された。

浅野が『社会学徒』の発行に執心したのは、当時の社会情勢とも関係があるといわれている。前年の1926年は一冊一円のいわゆる円本時代の幕開け、翌1927年には岩波文庫も刊行が始まり、わが国におけるまさしく活字メディア興隆の黎明期であった。とはいうものの、いざ蓋を開けてみると、月刊雑誌の編集発行というのは、想像以上に苦勞の多いものであった。とくに、編集者であった櫻井は、後年、「卒業してから一年近くたった日、駿河台の日大の一室に私が入って行くと圓谷先生と浅野氏とがいて、社会学の雑誌を創刊しようと話していた。「先生、ぜひやりましょう、櫻井君も犬馬の勞を惜しまないと言っています」というのは浅野氏だった。だが私には、この話は寝耳に水で私は何も知らないのであった。そのとき、圓谷先生と浅野氏との間にはおそらく相談がまとまっていたのであろう」と述懐している。まんまと浅野に抱き込まれて編集を任せられ、しばらくすると浅野はフランス留学に旅立ってしまう。残された櫻井の苦勞がしのばれる逸話である。さらに櫻井は企画編集のみならず、雑誌販売も任されていたようである。筆者も学生時代、馬場明男教授から、「よく駿河台下の丸善（三省堂か）で、櫻井先輩が店頭販売されているのを見たよ。「今月は何冊売れた！」とか喜ばれていたのを思い出す」と聞かされた。『社会学徒』は学科機関誌でないことは先述したが、さりとて日本大学社会学部の学会誌でもなかった。広く社会学研究者の声を世に問うという意味で、一般書籍としての販売と普及を目指していたのである。そのため、発行は「同人社会学徒社」であった。今日、『社会学徒』を紐解くと、あちらこちらにしゃれたカット画が目に入る。これは東京YMCAで教育主事をされていた圓谷の令夫人圓谷司娜子氏によるものである。まさに家内工業であったわけだ。

ここで、圓谷による「社会学徒発刊の辞」の一部を紹介しておこう。「(中略) その学を奉ずる社会学徒たるものも、時には無理解なる者の為に社会主義と同一に観念さるるの結果となって、其の飛火を受くるを免れ得なかった。(中略) それが大战後における世界舞台の大変革は、前髪をとらへられたる運命の神の如くに、社会学探求心の旺盛を誘致し、したがってその学徒は、恰も春の新生の如くに延び延びたる青草として現われ、かくして「我は社会学徒なり」の誇りを産むに至った。」ここには、世間か

らの社会学に対する当初の無理解と、第一次世界大戦後における社会学への期待と誇りの誕生という時代の変化が記されている。「学園と街頭とに群れる社会学徒にとって、漸次切実なる問題となって来たのは、発表機関の欲求である。(中略)かくして学は単なる象牙の塔の遊戯たるを去って、一般学界と社会への現れとして其の真相を展開し得るに至る。(中略)此の雄々しくも寂しき中に生みの声を発した本誌は、あらゆる意味に於て囚われざる立場を固く保持せんことを強く意識するものである。上述の意味に於て本誌の意義や深く、使命や大いなるものあるを思う。」やはり、『社会学徒』創刊の目的は「発表機関への欲求」と表現されている。これは、研究者たちが自己の業績作りのために発表機会を求めるといふ今日的な感覚ではなく、大正デモクラシーの延長として、時代に対する研究者たちの切実なる声を広く世に届けたいという意味で解すべきであろう。まさしく、「かくして学は単なる象牙の塔の遊戯たるを去って、一般学界と社会への現れとして其の真相を展開し得るに至る」のである。その意味では、学科・学会創設時の大正デモクラシーの機運は、『社会学徒』発行の精神にも受け継がれていたといえよう。

3. 戦時下の『社会学徒』掲載論文

『社会学徒』が創刊された1927(昭和2)年は、金融恐慌や第一次山東出兵がなされ、後に続く戦時のきな臭さが漂い始めた頃であった。それでも創刊当時の内容は、いたって純学問的な専門雑誌の体裁であったが、1932(昭和7)年あたりから、次第に時局に関する論文が掲載され始めるのである。先述した編集者の櫻井は、後年、当時を振り返り、「その間、発禁になったことはなかったが警視庁の検閲や警察署の特高へ出頭を命ぜられたことも数回あり、私の家が発行所になっているため、警官や特高係の来訪もしばしばであった」と述べている。さらに当時、考えさせられたのは、国家権力がダイレクトに社会学徒社に接近してきたことである。馬場明男によると、当時ナチスの社会学者と考えられていたハンス・フライヤーの所論を絶賛する野一色という人物がおり、彼の論文が『社会学徒』にたびたび掲載されていたという。野一色は京都帝大卒業後、参謀本部の職員として勤務していたが、何度も圓谷のもとを訪れては学生たちに激しい言葉で時局の話をしたり、従来の社会学に対して鋭い批判を浴びせかけていたそうである。フライヤー自身は戦後ドイツから海外に逃亡し、その

後の消息は不明のままだが、この野一色の消息も戦後は全く掴めなかったと馬場は述べている（馬場、1982、『社会学徒時代』）。

ここで、1932年あたりから変貌をきたした『社会学徒』に掲載された、戦局に関する所論の一部を紹介しておこう。1932年は、三井財閥理事長団琢磨が暗殺された血盟団事件が発生し、満州国が建国された年である。

1932年：木下宗一「満州の戦線を語る」

岩崎民雄「満州新国家の建設を語る」

1933年：圓谷弘「満州国を視察して」

1934年：岩村一夫「建設の満州国を探る」

1935年：モーニエ『植民社会学』（河合弘道訳）の連載スタート

1936年：池田善長「満州に於ける社会文化発現の基礎としての指導的民族」

1938年：井森陸平「戦時宣伝の原理」

1939年：岩村一夫「戦時経済体制の発展」

1940年：青木孝義「東亜共栄圏とフィリピン」

1942年：平館英作「戦時下における労働者移動交流現象に就いて」

齋藤正二「大東亜文化と日本精神」

1944年：岩村一夫「女子動員の基本問題」

1932年から1936年あたりは「満州」という言葉が躍っているが、1938年頃からは、戦時、東亜・大東亜、女子動員というように変化が現れて来る。この1938（昭和13）年は、国家総動員法が成立し、近衛文麿内閣が「東亜新秩序建設の声明」を出した年であり、3年後にはハワイ真珠湾攻撃で太平洋戦争に突入する戦時体制のスタートラインであった。圓谷の論調にも次第に大陸政策、南方進出を唱える色彩が強くなって来る。すでに圓谷は、1935年に中国で開催された東洋工業会議に委員として参加し、上海で文豪魯迅と会談、翌36年には有斐閣から『支那社会の測量』を出版している。

年譜に登場する岩村一夫は圓谷の教え子で、「圓谷の懐刀」とも称された人物である。それだけに、また毀誉褒貶の多い人物でもあったらしい。戦後は桜美林大学の教授を務めるが、30年代の論考は、ほとんど圓谷の論調と軌を一にしている。齋藤正二は、戦後の学科を率いた馬場明男に次ぐ第2代目リーダーである。私たちの世代が知る好々爺の齋藤が、戦時中、

このような勇ましい論考を物していたことには驚かされる。また、かつてはテンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を翻訳し、テンニース研究で独自の境地を切り開いた井森陸平までが、戦時体制に益する論文を執筆せざるを得なかったことにも万感胸に迫るものがある。

4. 『社会学徒』の休刊と圓谷弘の公職追放

何事にも始めがあれば終わりを迎えることは世の常だが、時代に翻弄された『社会学徒』も、やがてその日を迎えることとなる。1941（昭和16）年、アメリカとの開戦以来、極端な物資（紙）の不足と空襲による印刷所の焼失で、いよいよ『社会学徒』発行の継続も困難となって来た。

1944（昭和19）年第18巻第6号通巻第207号をもって月刊『社会学徒』は休刊となった。すでに昭和16年から、編集者は櫻井庄太郎から河合弘道にバトンタッチされていた。これにも、少々逸話があるのだが、足掛け15年もの間、日本大学工学部図書館主事や予科講師を努めながら、仕事の合間を見て櫻井は月刊誌の編集に携わってきた。原稿の依頼から広告主を探す営業・会計処理、印刷所に出向いての校正作業、さらには全国の購読者への発送作業まで、十数年間、家を空けることすらできなかったという。その激務の櫻井氏にも、ようやく束の間の休暇が得られるようになった。昭和16年、台湾台北帝国大学で開催された日本社会学会大会への参加である。神戸から出航した大和丸船内で、同船していた火野葦平・久米正雄・吉川英治ら作家連との合同座談会を開催したり、台湾に新たに赴任する長谷川台湾新総督にインタビューしたりしながら、その模様を逐次『社会学徒』誌上で報告していた。久々の櫻井リフレッシュの期間であった。しかし、帰国直後に事態は急変する。何等かの理由で櫻井は圓谷と衝突、対立してしまったのである。櫻井は、そのまま日本大学に辞職願を提出し、大日本青少年団本部に転職する。この件に関しては、その経緯を周囲の者たちも思いめぐらしたが、理由はわからなかったそうである。

櫻井の後、『社会学徒』の編集を担ったのは、日本主義社会学の提唱者河合弘道であった。しかし、河合も日本大学予科（世田谷校舎）の学監教授という要職にあり多忙であったため、実質的には工学部調査課に勤務する増田太次郎が引き受けた。

さて、その休刊号となる第207号には「休刊の辞」が掲載されているので、ここにその一部を紹介したいと思う。「今、われわれは決戦のさ中に

ある。凄壮といっても及ばぬ、苛烈といっても足りぬ現実の只中に立っている。この切迫した激しい現実には出版文化の各方面に様々な困難な事情を齎しつつある。(中略) 一貫連綿として、且つて休刊なかりし雑誌「社会学徒」も休刊の止むなきに立ち到った。戦勝の暁、日本社会学界が如何なる相貌と形態とを以って表われるかを楽しみとして、戦争継続中、一時的休刊を宣するものである。(以下略) 休刊号は、それまでの書籍形態ではなく、物資不足の折、試験の問題用紙の裏面に手書きでガリ版刷りされたものであった。

終戦直後の1946(昭和21)年、圓谷はその教育的指導力と経営的手腕を評価されて戦後初の日本大学理事長に就任したが、間もなく日本大学首脳として山岡萬之助総長らとともに「戦時教育に加担した」理由で公職追放の身となってしまう。3年後、61歳の若さで死去。1955(昭和30)年、戦後社会学科の主任教授となっていた馬場明男は自ら発起人となり、「圓谷先生七回忌追悼講演会」を、演者に高田保馬を招き法文学部大講堂で開催している。親友圓谷の功績をたたえる高田の追悼講演は2時間を超える熱のこもったものとなり、詰めかけた多くの聴衆に深い感銘を与えた。

日本大学辞職後、大日本青少年団に奉職していた櫻井も短期間公職追放となるが、やがて、モースの「ポトラッチ」の概念、さらにこれを契約意識に結びつけたジョルジュ・ダヴィの考察を下敷きにしたわが国の「恩と義理」に基づく日本社会史研究や、大日本青少年団奉職中に展開した青少年に関する教育社会学的研究が認められ、奈良女子大学教授として教育現場に復帰する。一方、『社会学徒』第2代編集者の日本大学予科教授(学監)河合弘道は公職追放となる前に自ら大学を辞し、後に米子市長に就任。4期16年という、地方自治体の首長としては当時の最長任期の記録を打ち立て、国から表彰を受けるに至っている。しかし、『社会学徒』創刊の発案者であった浅野研眞はすでにこの世に無く(昭和14年に病没)、圓谷もこの世を去って、大正デモクラシーの時代とともに産声を上げ戦時をくぐり抜けた日本大学社会科学部の第1期は、ここに静かにその幕を閉じたのである。

5. 戦後復興期における新リーダー馬場明男の基本姿勢

5-1. 戦後学科代表に就任した馬場明男

終戦直後の社会学科は、事実上の壊滅状態にあった。学生募集は、すで

に2年前から停止され、残された在校生の多くも学徒出陣で戦地に送られていた。圓谷は戦後初の日本大学理事長に就任していたが、間もなく公職追放。研究室には、当時大学院生で副手を兼ねていた深田弘（後の名誉教授）がただ一人残されるという有様であった。この時、在学していた数少ない学生の一人（後に日本社会党衆議院議員を8期務めた）竹内猛が研究室に飛び込んできて、その場にいた深田と島津猛（後の東海大学教授）に訴えた。「先生、社会学科は壊滅状態ですから馬場先生を呼び戻してください。これから僕は馬場先生を迎えに行きます」と。馬場明男（1905－1996）は戦時中、工学部専任講師であったが、1941年に住職をされていた父親の突然の死去に見舞われ、仏門を継ぐため職を辞していた。馬場は竹内の突然の訪問に驚きつつも、「永田菊四郎法文学部長（当時）が「来い」と言うのなら考えるが、学生が来てくれというだけで行くわけにもいかない」と、とりあえず事情を永田学部長に連絡した。すでに機転を利かした深田は永田学部長に直談判に就いていて、馬場と永田の話し合いもスムーズに進み、1946（昭和21）年馬場は復職し法文学部助教授に就任。社会学科の新たなリーダーがここに誕生した。理事長時代の圓谷は公職追放になる前に馬場を呼び、「神田三崎町時代の弟子は、いまや君一人しかいないのだから、今後いろいろ手助けしてもらうからよろしく頼むよ」と、学科の行く末を暗に馬場に託していたことを考えると、馬場の学科代表就任は定められた道であったのかもしれない。

それにしても、社会学科の歴史には、ひとつの法則が存在するように思える。それは、学科史の分岐点には、必ず教師と教え子との間に重要な interaction が存在するという法則である。まず、社会学科設置の折には、山岡萬之助に対して教え子の圓谷が「ぜひ、社会学の専門学科を創設しましょう」と持ちかけているし、『社会学徒』創刊の折には、圓谷に対して最初の教え子であった浅野が「ぜひ社会学の専門雑誌を創刊しましょう」と持ちかけている。さらに、馬場の復帰に関しては学生竹内の直談判といった具合に、たえず教え子が恩師の背中に火をつけているのである。少々大げさに言えば、教育社会学的にもこれは興味深い事実である。

5－2．学科人事体制の構築

馬場は、戦後の新たな学科代表に就任するに際し、その心境として、「自分は城代家老として、戦後の社会学科を守り率いていくつもりだ」と

その心境を語っている。馬場らしい古風な言い方ではあるが、圓谷が公職追放を解かれ、やがて復職するまでのつなぎの代表でいるつもりであったのだろう。しかし、圓谷は公職追放を解かれぬまま亡くなってしまう。当時の馬場の心境や、いかばかりであったろうか。

馬場が最初に着手したのは、学科人事の再構築である。スタッフは、馬場と助手の深田のみであったが、やがて芥川集一（後の専修大学教授）が復員し、さらに早川浩一（後の日本大学教授）が加わり、馬場と3名の助手という基礎態勢が整った。馬場が心がけたのは、いつ圓谷が復帰してきても問題がないように万全の態勢を整えておくことだった。そこで馬場が心を砕いたのが、圓谷が戦前構想しつつも叶わなかった銅直勇と杉山栄の教授登用である。

銅直勇（1889－1979）は、京都帝国大学時代、圓谷の2年先輩であったが、米田門下生として当時から高田保馬とともに気心の通じ合う学友であった。銅直は帝大卒業後旧制成城高等学校教授・校長、熊本師範学校校長、戦後は横浜国立大学教授・学芸学部長を経て、1958年、馬場の求めに応じて社会学科教授に就任した。一方の杉山栄（1892－1968）はマルクス思想研究者であるとともにジャーナリストであった。早稲田大学政治経済科（大学部）卒業後に山陽新聞社編集局長に就任。1922年、欧州留学時にちょうど期を同じくしてドイツ・ハイデルベルグ大学に留学していた圓谷と親交を結んだ。1941年には山陽新聞社副社長に就任するも戦後公職追放となる。公職追放解除後の1952年、馬場の求めに応じて社会学科教授に就任した。

これらは、圓谷が構想し、そして果たせなかった学科人事計画を、圓谷亡き後、「城代家老」たる馬場が奔走しつつ完遂したものであり、それは『社会学徒』の常連投稿者であった早瀬利雄（横浜市立大学教授）をして、「情熱の人事」とまで言わしめたほどである。

5－3. 馬場の胸に去来するもの

就任後の銅直と杉山は馬場の期待によく応え、後述する『社会学論叢』第13号（1958）には、両者の共同企画編集による重厚な「デュルケーム＝ジンメル生誕100年記念号」が上程されている。

やがて、馬場の教え子たちも順調に研究者としての成長を遂げ、社会学教育・研究に欠かせぬ重要な要員として学内外で活躍するようになって

いった。学科学生数も優に800名を超える学部最大規模にまで成長し、さらには、奈良女子大学教授を退官した櫻井庄太郎も社会学科教授として復帰して、圓谷以来の活況が研究室にみなぎるようになった。

しかし、それで得意満面になるような馬場ではなかった。彼はいつも自省の人であり、その胸に去来するものは、何よりも、学問上の父であった圓谷が常日傾心がけた人と人との交流の大切さであった。馬場の言葉に耳を傾けてみよう。「最近の『社会学論叢』はその知性において満ち溢れているにせよ、なにか愛情において欠けているという声を聞くが、この点われわれは急速に拡大強化された研究室のスタッフ相互間の意識の交流が充分でなかったり、(中略)それにはいろいろと理由があるが、なにはともあれ自己反省を試みる必要がある。」(馬場、1971、社会学論叢第50号)。かつて戦前期の圓谷は、学内外研究者の交流の場として、「社会学徒の群れの会」や「コントの夕べ」を主宰していた。前者は定期的開催される懇談会風の研究会であり、後者は、オーギュスト・コントの誕生日(1月19日)に毎年開催された社会学事情の情報交換会であつたらしい。ここでは、フランス留学から帰国した浅野研眞が、現地におけるコント研究事情を講演したりしている。このような交流を学生時代から体験してきた馬場が、そのような気風を継承することに心を砕いた心境は十分理解できるだろう(馬場は圓谷に倣い、1962年11月から学内外の研究者に開かれた研究談話会「エルガの会」を毎月主催するようになった)。

さて、戦後の大学も順風満帆ではなかった。とくに、1960年代後半に勃発した大学紛争は、日本大学にも大きな影響をもたらす。日大闘争は国税局問題に端を発し、学園民主化の問題にまで発展。東大闘争とならぶ熾烈なものとなった。1968年6月13日より学生はストライキに入り、文理学部校舎は学生たちによって占拠されている。4年生たちの卒業単位を何とか充足させるため、「疎開授業」と称して千葉県成東で集中講義が行われ、残る3・2・1年生は翌69年6月より前年度授業を府中の仮設プレハブ校舎において集中講義形式で消化するという状態。混乱のなか、実質的な69年度授業は9月からスタートという有様であった。

馬場は、日大闘争が発生する直前の1967年度を以って、学科代表の地位を圓谷門下の弟弟子でかつ教え子にあたる斎藤正二にバトンタッチしたばかりであった。学園紛争に対しても馬場は毅然とし、むしろ学生たちに寄り添う姿勢すら見せている。1968年当時、馬場はラディカル社会学を再

考し、C.W.ミルズや、アメリカ公民権運動を率いたマーチン・ルーサー・キング牧師の『黒人の進む道』に関する書評論文を发表或りしている。大学人として体制的に反動化もせず、リベラリズムを貫いた馬場の姿勢は、やはり大したものだと思う。当時の馬場の言葉をふりかえっておこう。「しかるに、大学の歴史にかつて経験したことのなかった日本大学の紛争は、われわれの研究室にも波及し、一時的にもその研究活動を停滞せしめた。もちろんこの歴史的出来事をたんなる不祥事として看過するのではなく、このことから貴重な教訓を学びとり、今後の研究と教育活動に生かさなければならぬものがある。」(馬場、1971、社会学論叢第50号)。

6. 『社会学論叢』 発刊事情

6-1. 前史としての「社会学彙報」と「研究室月報」

さて、ここですでに幾たびか言及した『社会学論叢』誌に言及しておこう。今日、これは日本大学社会科学部の公認学会誌となっている。しかし、戦前戦中期の『社会学徒』の衣鉢を継ぐものとして、戦後の日本大学社会科学部の再開とともに生まれたものではない。

『社会学論叢』誕生の前史は、1948年9月に第1号が発行された「研究室彙報」に遡る。当時助手を務めていた芥川集一が、自らガリ版刷りで作成したわら半紙1枚のものであった。第1号には、馬場による「M.ヴェーバー復興の社会学的意義」が掲載された。ヴェーバーの没年が社会科学部・学会創設と同じく1920年であったことを考えると、「ヴェーバー復興」と題されたこの論考は、まさしくその後の『社会学論叢』誕生の前奏曲であったような気がしてくる。つづく第2号には、斎藤正二の「社会学と思想」が掲載され、以後1949年4月に発行の第5号まで継続された。

しかし馬場は納得できなかった。『社会学徒』と比較すると、その差はあまりにも歴然としている。もう少し雑誌的なものは作れないか。そこで、さらなる工夫を重ね、1950年9月から「研究室月報」が発行される。これも第5号まで継続したが、馬場は、機は熟したと本格的な雑誌発行の計画に乗り出す。そして、いよいよ1953年11月、本格的な専門雑誌形態の『社会学論叢』が、不定期刊行の形ではあるが創刊されるに至ったのである(「研究室月報」は、その後「研究室報」と名称を変更し、一時は最大28頁にもなる形態で1970年代後半まで『社会学論叢』とともに同時発行されていた)。

今日の『社会学論叢』の発行母体は日本大学社会学会である。日本大学社会学会は、学科と同じく1920年創設であり、戦後しばらくは休会状態であったが、1947(昭和22)年には大会が再開されている。しかし、当初、『社会学論叢』の発行母体は学会ではなく「日本大学社会学研究室」であった。『社会学論叢』が日本大学社会学会の学会誌となるのは、1972年の第54号からである。それには、『社会学論叢』創刊に込められた馬場の思惑、刊行目的が存在していた。

6-2. 刊行目的の変遷(「発表機関の確保」から「学界での認知」へ)

馬場が『社会学論叢』創刊にこだわったのは、圓谷の『社会学徒』の衣鉢を継ぐことと同時に、何よりも弟子たちに論文発表の機会を与え研究業績を蓄積させるためであった。そのため、弟子思いの馬場は、発行の企画編集、校正等、諸作業のすべてを一人で行い、第10号あたりまでは出版経費も自分の私財で賄っていた。

しかし、当初不定期刊行であった『社会学論叢』も出版状況が軌道に乗り始めると、当初の夢、すなわち『社会学徒』に匹敵するものをという期待が再び膨らみはじめてきたのである。学界で『社会学論叢』の存在を認知させること。そこで馬場が目をつけたのが記念号・特集号の発行である。今日の学会誌も、たんなる論文集ではほとんど関心がもたれず、しかし記念号・特集号は購読数が上昇するという現象がある。出版状況が軌道に乗り始めた1957年の第9号に、馬場は初の記念号を企画・出版するに至った。それが「コント歿後100年記念号」である。ここでは、『社会学徒』時代に活躍した故浅野研眞によるコント著作目録も公開されている。以下10年間に発行された主だった記念号・特集号の一覧を掲げておきたい。

- 1958. 第10号：大衆および大衆社会特集号
- 1958. 第13号：デュルケーム＝ジンメル生誕100年記念号(銅直勇と杉山栄の共同企画)
- 1962. 第25号：ルソー生誕250年記念特集号(学科創設時の大正デモクラシーの意義を再認識させる目的で企画された。また河野健二京都大学教授の推薦で、本書はスイスのルソー研究所に所蔵されるに至った)
- 1964. 第28号：労働と余暇特集号(開会を目前に控えた東京オリンピックを念頭に企画された)
- 1964. 第30号：M. Weber生誕100年記念号
- 1967. 第37号・第39号：日本社会学(明治期)特集号(1)(2)(明治百年を記念した文部

省科研費研究・研究代表者馬場明男、共同研究者新明正道・大道安次郎・早瀬利雄・富田富士雄・阿閉吉男・横山寧夫の研究成果)

6-3. 編集委員会制度の導入と学会誌への成長

馬場は1975(昭和50)年11月をもって日本大学を定年退職(満70歳)した。当時の規定では、65歳以降は定年延長制が適用されていたが、馬場は定年延長に入る前の1968年度には、学科代表職を後進の斎藤正二に譲っている。それはそれで順当なプロセスではあるが、後進たちにとっては戸惑いもあった。「今まで馬場先生が一人で率いてきた『社会学論叢』の編集発行を、今後誰が引き受けるのか…」そこで発案されたのが、編集委員会制度の導入である。1968年4月のことである。馬場は、当時は以下のように回顧している。「この15か年間、計画、編集、校正、ときには発送もたった一人でやったこともあり、思えば苦節15年間であった。時折、スタッフは幾人いるかと聞かれ、返答に窮することもあった。数年の間は財政的にも随分と困難を極め、月給の前借りをして印刷屋に月賦で支払ったこともあった。(中略)私は専ら相談役ということで一応閑職におちつくつもりである。」(馬場、1968、第41号編集後記)

苦節15年、頭が下がる思いであるとともに、一抹の寂しさも感じる時代であった。が、しかし、新たに発足した編集委員会制度の活動は、それに伴う『社会学論叢』の日本大学社会科学部正式学会誌への成長(1972年第54号から)をもたらしたのである。

7. 補遺(残された課題)

7-1. 『社会学論叢』における翻訳論文掲載の意義

さて、いよいよ締めに入らねばならない。今後に残された課題を、私見ではあるが申し述べておきたい。最近の『社会学論叢』には、皆無ではないものの、翻訳論文の掲載がいたって少なくなっている。著作権や翻訳権の問題もあり、かつてほど翻訳掲載がたやすくはないことは理解できるが、海外研究者との交流も盛んになっている今日、けっして困難なこととも思われぬ。『社会学徒』時代においては、何よりも海外の学問成果を輸入することが学界活動の第一眼目であったため、競って翻訳論文が掲載されていた。今日では、SNSの普及により、学会誌において翻訳論文を掲載しなくとも、さほど問題はなさそうに思われる。しかし、学問の最先端の潮

流を示し、問題提起を行う上で、いち早く海外の翻訳論文を掲載することの意義は今日でもなお大きいのではないだろうか。

私がこのことに気づいたのは、馬場が定年退職後も毎週神田は洋書専門店の北沢書店に足繁く通い、たえず最新の海外著作を購入し、『社会学論叢』に毎号の如く、それらを紹介する姿を見てきたからである。馬場は、かつて次のように述べていた。「研究誌というものは、紙と活字とを機械的に寄せ集めても生まれるものでなく、つねに学界に新鮮なる空気を与えようという指導性と時代的感觉が必要であることの自覚を失うならば学問の道は断絶するであろう。」(馬場、1971、社会学論叢第50号) 常日頃、最新の洋書と格闘していた馬場は、それが今日のわが国にとって必要なものかどうか、たえず「自問的に査読」していたという。「無批判的にアメリカ社会学のすべてを摂取するのではなく、わが国の現状を十分に検討し、将来の社会発展に裨益しうる問題群を設定し、取捨選択の上に問題となるべきものをとりあげるべきである。」(馬場、1971、武田良三博士古希記念論文集『近代社会と社会学』所収)

具体的に、馬場が現役当時に企画し、取り上げた翻訳論文を見てみると、上記趣旨が確かにうかがえる。

- 1958. 第11号：R.K. マートン（海野訳）「科学的発見における優先権」（コロンビア大学留学中の馬場と親交を結んだ、「科学の社会学」研究でも著名なマートンによるアメリカ社会学会会長講演で、マートンから直接馬場にリプリントが送られてきた。）
- 1959. 第16号：D. ベル（馬場・海野共訳）「疎外の意義～歴史的マルクスの探求に関するノート～」(これも、コロンビア大学留学中に親交を結んだベル本人から直接馬場に送られてきたタイプライター原稿であり、後に『イデオロギーの終焉』に所収された論文である。)
- 1960. 第17号：T. パーソンズ（早川訳）「職業としての社会学が当面する若干の問題」
- 1960. 第18号：R. ベンディックス（塩田訳）「産業化、イデオロギー及び社会構造」（本号巻頭に、馬場によるリブセットとベンディックスに関する解題がある）
- 1960. 第19号：M. ギンスバーグ（鷹取訳）「社会変動」
- 1960. 第20号：W.F. オグバーン（山田訳）「社会学の前途に及ぼす諸影響」（Social Forces誌に掲載されたオグバーンの遺稿）

7-2. 教育的メディアとしての『社会学論叢』

今後の『社会学論叢』誌上における翻訳論文掲載への期待とともに、い

ま一つ期待したいのが、『社会学論叢』と学生との結びつきである。現在でも、大学院生が学位取得のための基礎論文として『社会学論叢』への投稿機会を活用することはあり、また、かつては、「大学院生特集号」も何度か刊行されてきた。しかし、『社会学論叢』初期には学部学生の研究報告も掲載されているのである。研究者の研究成果のみならず、学部学生にとっても教育的メディアとして機能していたことがうかがえる。

社会学部にカリキュラム上の本格的なゼミナール制度が導入されたのは2006年度からであった。それまでは、必修科目としての演習に学ぶというスタイルであった。したがって、過去においては、その欠を埋めるべく自主ゼミナールの開講が盛んな時期があった。1959年の社会学論叢第15号の「研究室だより」には、以下のような記事が見える。「研究室の学生研究会は助手及び副手の指導の下に研究活動を行っている。社会心理研究会（毎週月曜日）、社会調査研究会（毎週水曜日）、社会福祉研究会（毎週木曜日）、社会理論研究会（毎週金曜日）。各研究会とも約15名から20名位の学生が参加し、テキストの研究及び討論に活発な意見を交換しているが、夏期休暇以後には更に意欲的な研究及び調査活動を行う計画である。」これら学生研究会の調査報告が、すでに『社会学論叢』第6号に掲載されているのである。

1956. 第6号：社会心理学研究会「高校生のパーソナリティについての調査報告」
社会調査同好会「農村世論調査の報告」

1960年代に入ると、さらにマス・コミ研究会、産業労働研究会がこれら学生研究会団体に加わり、ますます学生の自主ゼミ的研究活動は活況を呈していたようだ。

今日では、2010年の学科創設90周年を記念する継続行事として、「ソシオフェスタ」というゼミナール毎の研究発表会が毎年開催されるようになったが、『社会学論叢』との連動は企画できないものだろうか。学部学生は、将来の社会科学および社会学会を率いていく若い後進の宝庫である。今後の展開に期待したい課題である。ではここで、若き後進たちへの夢を語りつつ、百年史を終えることにしよう。

文 献

ここに、日本大学社会科学部および社会学会の歴史に関する主要参考文献をま

とめておきたい。まず、単独の著書としては、
馬場明男、1982、『社会学徒時代～創刊から廃刊まで～』、私家版
海野 力、2006、『圓谷弘先生伝』、文成印刷
海野 力、2006、『馬場明男先生回顧録』、文成印刷
つぎに、『社会学論叢』に掲載された所論をあげると、
馬場明男、1971、「日本大学社会学科創立五十年史」（第51号・日本大学社会学
科創立五十周年記念号）
藤田弘夫、2000、「日大社会学科の誕生・歩み・これから」（第139号・社会学科
創設80周年記念号）
松岡雅裕、2010、「日本大学社会学科90年の歩み—学生とのinteractionの視点か
ら—」（第169号・社会学科創設90周年記念号）
夏刈康男、2000、「日大社会学の指針—社会学科創設80周年記念号によせて—」
（第139号・社会学科創設80周年記念号）
社会学論叢編集委員会編、1975、「座談会 日本大学社会学科と馬場先生」（第
64号・馬場明男先生特集）
梅沢 孝、1991、「大正デモクラシーと社会学—米田社会学と日本大学社会学科
の創設—」（第112号・社会学科創設70周年記念号）
最後に、連載企画「シリーズ・復刻『社会学徒』と「シリーズ・『社会学論
叢』55年の歩み」を紹介しておこう。
前者は、戦前戦中期における社会学科の主要人物、および『社会学徒』に掲載された彼らの代表的論文を復刻紹介した企画で、第154号（2005）から第159号（2007）までの6回にわたり連載されている。取り上げた人物は、圓谷弘、高田保馬、櫻井庄太郎、浅野研眞、銅直勇、杉山栄、馬場明男、河合弘道である。
後者は、『社会学論叢』が創刊された1953年以降の社会学科および社会学会の歴史を50年代、60年代、70年代…と2000年代まで10年刻みで紹介した企画で、第160号（2007）から第165号（2009）までの6回にわたり連載されている。この連載では、同時に『社会学論叢』創刊号から第164号までの掲載論文総題目が10年単位で記されており、かつ各時代のユニークな注目すべき論文も復刻掲載された。